

臨床病理学的所見から見た2cm以下末梢小型肺腺癌 に対する縮小手術の可能性

著者	遠藤 俊輔, 斎藤 紀子, 大谷 真一, 長谷川 剛, 手塚 憲志, 佐藤 幸夫, 蘇原 泰則, 村山 史雄, 坂東 政司, 大野 彰二, 杉山 幸比古
雑誌名	肺癌
巻	43
号	5
ページ	549
発行年	2003-10-20
権利	日本肺癌学会
URL	http://hdl.handle.net/2241/00134142

P-258 臨床病理学的所見から見た 2 cm 以下末梢小型肺癌に対する縮小手術の可能性遠藤 俊輔¹・斎藤 紀子¹・大谷 真一¹・長谷川 剛¹
手塚 憲志¹・佐藤 幸夫¹・蘇原 泰則¹・村山 史雄²
坂東 政司³・大野 彰二³・杉山幸比古³¹自治医科大学 外科学講座 呼吸器外科；²国際医療福祉病院 外科；³自治医科大学呼吸器内科

当施設での末梢小型肺癌症例の臨床病理学的背景を retrospective に検討し、積極的縮小手術の可能性を探った。1992 年から 2002 年までに当科で手術を行った最大径 20 mm 以下の末梢小型肺癌初発切除 125 症例で男性 69 例女性 56 例平均 64 歳を対象とした。腺癌 91 例扁平上皮癌 21 例大細胞癌 10 例小細胞癌 2 例。胸腔鏡生検で診断確定したのは 60 例で、このうち切除後の残存肺に明らかに癌の遺残を認めたものは 4 例 7% であった。肺葉切除 117 例、区域切除 5 例、部分切除 3 例で、リンパ節郭清は ND1 以下：11 例 ND2 以上：114 例。病理組織では胸膜浸潤 39 例 31%、リンパ節転移 23 例 18% (N1: 7 例 N2: 16 例)。全症例の 5 年生存率は 85% で、非浸潤型腺癌症例(野口 AB)では 93% であった。結語 浸潤型症例は 20% に縦隔リンパ節転移が認められ、縮小手術の適応とならない。非浸潤型症例ではリンパ節郭清を省略可能だが、病巣からの距離を取るためには、区域切除か肺葉切除が必要である。